

みんなでつなぐ命のバトン

南城市立大里北小学校 六年 比嘉 七 彩

「七彩、友達は大切に、仲良くしないといけないんだよ。」

私が友達とケンカをしたとき、祖母はログセのようにこの言葉をかけてくれました。

でも、当時まだ一年生だった私はこの言葉の意味をあまり理解できませんでした。

「どうしてそんなに友達を大切にしないといけないの？」

そう祖母にたずねると、祖母は顔をくもらせながら自分が約七十年前に体験した「沖縄戦」について話し始めました。

雨のようにふるばくだん。情け容しやなく人をうつアメリカ兵。暗いガマの中、殺される事を恐れ、自ら命をたつ人。周りではたくさんのおとい命が消えていく。

どれだけつらく、怖い思いをしたでしょうか。

祖母はこきゅうを整え、話を続けました。

「とっても怖かったよ。ほんのささいなケンカから始まる戦争もあるからおばちゃんは怖いわけさあ。だから七彩も友達と仲良くしてちょうだい。」

祖母は私の目を見ながら話してくれましたが、その目にはなみだがうかんでいました。

祖母の心には戦争が終わって七十年以上たっても深い傷が残っているそうです。

いつも笑顔を絶やすことのない祖母のつらそうなすがたを見て、

私は何も言えず、むねが苦しくなっていました。

人の欲望のために多くの人がぎせいになって、たくさんの人や自然が傷ついていく戦争は、命だけでなく、笑顔、そして、人としての心もうばっていきます。

それなのにどうして世界から争いが消えないのだろう。争い事が必要れば、みんなが協力しあえる幸せな世界になれるのに…。

戦争やいじめなどのニュースを見るときつとだれもがそう思うでしょう。

私は、戦争やいじめが起きてしまう原因は命の重みを知っていないからだと思います。

たった一人の命をどれだけの人が支えているでしょう。

たった一人の命をどれだけの人が愛してくれているのでしょうか。

たった一つの命が消えたらどれだけの人が悲しむのでしょうか。

それはどんな人でも同じことです。

愛されていない人はいません。

すてていい命ありません。

祖母はあの苦しい地ごくを生きて、私たちに命のバトンをつないでくれました。

そして、その命が争いで消えてしまわないようにつらい体験を私に話してくれました。そして、祖母の体験を聞いたあの日から、私はある決意を固めました。

「命はそまつにしない。もう、あの悲げきを起こさないために、私も戦争の話を子孫に伝えていこう…。」

青い海、美しい空、ひびきわたる三線の音、愉快的笑い声…。

私たちはそんな沖縄を守る使命を持っています。

もう二度とこの島が悲しみで包まれないように…。

戦争で希望を無くした人々の希望と笑顔をもう一度とりもどせるように…。